

冬の小さな室内楽演奏会

～弦楽六重奏曲に寄せて～

2025/12/26(金)

遠友学舎 談話ラウンジ

E.コルンゴルト

弦楽六重奏曲 ニ長調 Op.10より3,4楽章

Vn1st 孫泰俊

Vn2nd 東海林里香

Va1st 井田俊介

Va2nd 山本夢萌実

Vc1st 川端祥太郎

Vc2nd 和田瑛怜奈

～ 休憩（10分）～

P.チャイコフスキー

弦楽六重奏曲「フィレンツェの思い出」 Op.70

Vn1st 藤野歩果

Vn2nd 東海林里香

Va1st 勝又十勝

Va2nd 嶋田舜紀

Vc1st 柴垣匠汰

Vc2nd 川端祥太郎

E.コルンゴルト

弦楽六重奏曲 ニ長調 Op.10より3,4楽章

コルンゴルトはオーストリア出身の作曲家で、40代以降はアメリカで活躍しました。グスタフ・マーラーに「天才」と絶賛され、わずか11歳でバレエ音楽『雪だるま』がウィーン宮廷歌劇場で上演されるなど、音楽史でも稀に見る神童でした。弱冠20歳にしてプッチーニの絶賛を受け、オペラ作曲家としての地位を確立し、他のジャンルにおいても旺盛な作曲活動を行います。ところが1938年、ドイツのオーストリア併合によりユダヤ系だった彼はアメリカに亡命し、その後は生活のためにオーストリア時代に出会った映画音楽を書いて過ごします。後年はハリウッド映画音楽の巨匠（『ロビン・フッドの冒険』など）として、後世のジョン・ウィリアムズにも多大なる影響を与えました。

この弦楽六重奏曲は彼が17~19歳の時に作曲され、純クラシック作曲家としての才能が最も輝いていた時期の作品です。第一次世界大戦の最中でしたが、音楽に戦争の影はなく、むしろ「古き良きウィーン」への愛着や青春の輝きに満ちています。また、六重奏曲の大家であるブラームスの風格を意識させる、分厚くシンフォニックな響きが特徴です。

第3楽章：Intermezzo. Moderato con grazia

優雅なウィーン・ワルツ風の間奏曲です。ヨハン・シュトラウス2世の時代を懐かしむような、上品で軽やかな音楽です。ウィーンのサロンの雰囲気味わえる、コルンゴルトらしいチャーミングな一曲です。

第4楽章：Finale. Presto

エネルギッシュでユーモアに富んだフィナーレです。高速で駆け抜けるリズムの中に、前の楽章の主題が回想されたり、遊び心のあるフレーズが登場したりします。最後はニ長調の輝かしい和音で、圧倒的な肯定感とともに幕を閉じます。

P.チャイコフスキー

弦楽六重奏曲「フィレンツェの思い出」 Op.70

ロマン派時代の作曲家であり、ロシアを代表する作曲家として知られるチャイコフスキー。彼はモスクワ音楽院の教職を辞し、作曲に専念するためにヨーロッパ各地を転々とししました。そんな中、フィレンツェ滞在中に作曲されたこの作品は、彼が最後に手がけた室内楽曲でもあります。最晩年に到達した彼の「円熟した技法」と、「美しいメロディ」、そして「情熱的なエネルギー」が凝縮された名曲です。

彼にとっては唯一の弦楽六重奏曲ですが、たった6人の演奏とは思えないほどの「分厚い響き」が特徴です。チャイコフスキー自身、手紙の中で「6本の楽器のために書くのがこれほど難しいとは思わなかった」と語っており、苦心の末に交響曲のような重厚感と、室内楽の繊細さを両立させました。そのため、弦楽合奏で演奏されることも多い作品です。

作曲を開始したのはイタリア滞在中ですが、実際に曲が完成したのはロシアに帰国した後です。そのため、イタリアの明るく歌うような雰囲気（特に第2楽章）と、ロシアの土着的な熱気や哀愁（第3、4楽章）が入り混じった独特の世界観を持っており「フィレンツェでの日々をロシアから回想している」曲であるといえるでしょう。

第1楽章：Allegro con spirito

冒頭から、チャイコフスキーらしい激しく情熱的な第1主題がいきなり提示されます。悲劇的でありながら力強いエネルギーと疾走感に満ちており、一度聴いたら忘れられないインパクトがあります。第2主題はイ長調の穏やかで優美なメロディが現れ、激しさとの対比が印象的です。二つの主題による複雑で豊かな響きのポリフォニック（対位法を用いた）な中間部から第1主題に戻り、今度はニ長調の第2主題が繰り返されます。長調のまま曲が終盤に繋がるように見せながら、ニ短調で第1主題が再登場しそのままコーダへと入り、急加速して終わります。

第2楽章：Adagio cantabile e con moto

6台の弦楽器の響きに満ちた序章の後、ピッツィカートがギターやマンドリンのような伴奏を刻みます。そこに、ソプラノの第1ヴァイオリンの語りかけとテノールの第1チェロによる愛を語らうような甘美な二重奏を奏でます。まさにイタリアのオペラのアリアを思わせる、ロマンティックな「歌」の世界です。主旋律がほかの楽器に受け渡され

る中で大きく高揚し、やがて全員のカンティレーナへと続きます。中間部では三連符による二短調の間奏が現れますが、今度は第1チェロの語りかけに第1ヴァイオリンが応える形でロマンティックな曲調に戻っていきます。

第3楽章：Allegretto moderato

イタリアの雰囲気から一転して、ロシアの民謡風の素朴な旋律が現れます。哀愁を帯びたメロディですが、リズムは舞曲のように軽快です。中間部では、コサックを思わせる賑やかで技巧的な盛り上がりを見せます。

第4楽章：Allegro vivace

ロシアの農民の踊りを思わせるような、土臭くエネルギッシュな楽章です。構成としては、展開部なしのロンド・ソナタ形式となっており、複数の主題が変形されつつ繰り返されます。第1ヴァイオリンによる二短調の主題の後、1ヴィオラから始まるフーガによって長調に転じます。複雑な絡み合いがやがて合流すると、第1ヴァイオリンと第1チェロによる八長調の第2主題が朗々と歌い上げられます。第2主題の提示が終わると、第1ヴァイオリン、第2ヴィオラによって第1主題が長調で示され、半音ずつ上昇する転調によって第1主題が二短調で刻まれます。ヴァイオリン2台→ヴィオラ2台→チェロ2台の順に第1主題が登場すると複雑なフーガになります。ヴァイオリン2台による第2主題が二長調で戻ってくると、最後は輝かしく圧倒的なエネルギーを放ちながら幕を閉じます。